

「落語と私」 その貳拾伍

三代目 橋ノ百圓

エー、落語の四季テェ事で、今回は、最後の冬ですが。冬の噺は名作が揃っています。皆様ご存知の「文七元結」「芝浜」「藪入り」等、まだまだ在りますが、只、冬の噺と言いましても「首提灯」「替り目」「うどん屋」の様な、冬全般を語る噺と「御神酒徳利」「掛取り万歳」「芝浜」などの暮から大晦日のもの、又、「御慶」「かつぎや」「初天神」でお分りの様な年が明けてからの噺と分かれていますが、それぞれに名作が残っております。その上、江戸から明治にかけては、江戸では火事が多かったので、江戸の名物を詠んだものに「武士、鯉、・・・火事に喧嘩に・・・」後で完全版を出しますが、火事に関する噺も実に数多く在ります。「味噌蔵」「富久」「火事息子」などがそうですネ。

先日テレビで「落語ディパー」と言う、東出某さんと、春風亭一之輔師他数名の噺家さん達が「ねずみ穴」について意見交換をしておりましたが、この噺は、好き、嫌いがハッキリと分かります。噺全般が暗く、噺の中ほどで出世をする個処も在りますが、後半部は、どんどん落ち込むと言う、聴き手も体力のいる噺です。粗筋を書きますと。

田舎から江戸で財を成した兄を頼って、弟の竹次郎が訪ねて来たのを「奉公はつまらネェから、自分で商売ぶて」と元手の金を貸してくれる。中を見ると、たったの三文(七十五円)弟はバカにされたと思い、この銭を捨て様と思ったが、これを資本に寝る間も惜んで働き続け、十年後には深川に、蔵の三戸前も有る立派な商人に、風の強い日、三文の資本を返しに兄の所へ、そこで兄の本心を聴かされ、兄の願いで仕方無くそこに泊る事となるが、真夜中に深川辺りが火事、急いで店に帰ると竹次郎が気にして、番頭にも塞ぐ様に頼んでおいた「ねずみ穴」から火が入り、三ツの蔵が焼け落ちてしまう。そこから運に見放され、暮に仕入の金を借りに、七ツになる娘を連れて兄の所に、兄は落ちぶれた弟を見て「一両か二両なら貸してやるが、五十両百両なんて貸せネェ」と竹次郎に手を上げて追い帰す。肩を落して歩く父竹次郎に娘が吉原に身を売って五十両のお金を・・・その帰り道、吉原の方に手を合せていると、男がブツかって来て、その五十両をスラれてしまい絶望の淵へ、もう駄目だと松の枝に帯を掛け「南無阿弥陀仏・・・ウーン」「こげんに良くうなる奴は無エナ、おい竹起きろ！」デッ！これが夢と解る夢落ちです。実に全篇暗いでしょ。現在は多くの噺家さんが演じますが「ねずみ穴」と言えば談志さんですネ。

冬の噺の中の「芝浜」と「文七元結」は落語中興の祖、三遊亭圓朝の作として在ります。「芝浜」は三題噺の名作、「文七元結」は元話は中国と言われてますが、その時分架かっていなかった吾妻橋を出して噺を膨らませたり、吉原の佐野槌で苦界を話したり各処に圓朝の想いが綴られています。

デッ！今回は何を取り上げますか!? 結果



明暦の大火

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

「火事息子」にします。この噺は圓生流と正蔵流に演出が分かれていますが、私は親子の情の厚い、正蔵流を選び、直弟子の林家時蔵師匠にお稽古をお願いしました。

噺の入口が、やはり江戸の火事の多さを伝える為に「江戸の名物はと申しますと、武士、鯉、大名、小路、生鱈、茶店、紫、火消、錦絵、火事に喧嘩に中ッ腹、伊勢屋、稲荷に犬の糞くそテンで、妙な物までが名物になっておりますが」で始まりまして、大岡越前守が組織した町火消と以前から有りました。公儀の火消屋敷の違いを並べて、町火消の「いろは四十八組」の入って無い文字の説明を。先ずへ組が有りません。次にひ組

が無い、それとら組、そしてん組が無いのです。勘の良い皆様ですから、その理由は、お解りだと思えますが、それに代りまして、百、阡、萬、本と言う字を当て代えまして「いろは四十八組」が出来たのです。時代劇などを観てますと、町火消が、紅蓮の炎の中、鯨いなきせ背に鉢巻をして、袴纏一枚着て、威勢良く纏まといを振っている姿を観ますが、あれは嘘ですヨ！そんな事してたら、命が幾つ在ったって追い付きません。町火消が火掛ひがかりをする時は、刺ッ子の長袴纏に頭巾を被って消火に当る訳で、命が一番ですから。そこへいくと、以前から有った火消屋敷（常火消）。これは大名屋敷、旗本の屋敷が火事の時の専属で、ここで働く火消人足の事を臥煙がえんと言いまして体一面の彫物、火掛りの時も、屋敷から拝領になりました法被一枚に新しい晒を六尺に切って下帯（禪）に、又、一丈二尺の晒を腹に巻いて、白足袋履いて、頭ッから水を何ン杯も被って鳶口持って火ン中に飛び込んで行く訳ですから、正に命知らずの者ばかりです。只こう言う連中ですから日頃の行いが良く無い、町方の鼻摘み者ン。火事の好きな若旦那は、頭かしらが先手を打って廻した回状の為に町火消には成れず、臥煙の仲間入り、そして勘当。古今亭では、若旦那が、母親の夢を見て枕を濡す処から噺が始まりますが、この辺りも、親子の情ですネ。

林家は、若旦那の親元の大きな質屋、伊勢屋の近くで小さな火事が起きた処から、旦那、番頭、小僧の定吉の三人で蔵の目塗りを始めるのですが、これは素人の三人ですから、上手くいくわけない！そこへ体中に彫物をした若旦那が、屋根から屋根え飛び歩いて番頭の元へ「オイ番頭！」「アッ！私お金持ってません」「何を言ってやんでエ、こんな所とこに追剥が出るケエ、俺だィ」「貴方は、勘当に成った若旦那」これから若旦那は目塗の手助けをして、五年振りの親子の再会となるのですが、若旦那は台所の竈へっついの側で法被から出ている彫物を気にしながらの対面、昔から厳父慈母と言いますが、父親は世間体を気にして、優しい言葉を素直に掛けられない、そこを母親が愛情タップリに声を掛けてやる。ここで若旦那の心も、両親の想いを一身に受けて、心が動くわけです。母親が「この子は色が白いから黒い物が似合いますから、黒羽二重の紋付に仙台平の袴ア穿かせて、雪駄履きで小僧を付けて遣りましようかね!」「オイ馬鹿な事オ言うんじゃ無いヨ、こんな勘当したヤクザな倅に、黒羽二重の着物に仙台平の袴ア、雪駄履かせて小僧を付けていったい、何処へ遣ろうテンだ!」「だってお爺さん、火事のお陰で会えたんですから、火元に礼に遣りましよう」これは逆さ落ちです。この先はどうなるのかは皆様それぞれの想いです。



江戸の華、い組の纏（歌川芳虎 画）

出典：東京消防庁 https://www.tfd.metro.tokyo.lg.jp/libr/qa/qa_04.htm